

ない。むしろ政治情勢の変化の爲であつた。即ち打倒鎌倉幕府の空気が顯著に濃厚となり、遂に正中の変・元弘の乱・建武中興という一連の倒幕運動が展開されるのであつて、彈圧が緩くなるのもそれに平行した。しかも單に消極的に彈圧がゆるめられるという丈けではなく、遂に勅願寺繪旨を獲得し京都に於ける市民権を確保していつたのである。しかし三度に亘つた彈圧を眺めて此に至ればその余りに唐突なるに驚かされる。何故に繪旨が與えられ何故にそれが「当宗の悦」として極言され、積極的にそれに答えていつたのであろうか。

凡そこの時代に於ける人間や集團は夫々南北兩朝の何れかに去就したのであり、教団とてもその例外ではなく、自己のもつ兵力・経済力・祈禱力等を政治権力に提供したのであつた。しかしもとよりそれは一方的要請に対する答として提供されたのではなく提供の代償は当然求められたのであつたが、その代償の求め方に於いて新旧兩教の間には著しい断層があつた。この時代の社会

史の大きな推移は地頭の莊園侵略・守護大名の成立であり、この動きは旧仏教を支えていた莊園を激しい動搖につき落した。旧仏教はその動搖を食い止め寺領の確保の爲に自己のもつ機能を政治権力に提供したのであつた。下降する自己をくいとめ得るブレッキが政治権力に外ならなかつた。かくして彼等と権力との結託は不可避である。この様な動きに対して、衰えたとはいへ尙強固な権力と權威を有していた旧仏教の勢力圏内に教団を形成しなければならなかつた新仏教は政治権力に自己の機能を提供することによつて彼等に対する防壁を獲得せんとした。それは、旧仏教の下降を食い止めるブレッキに對せば上昇への足掛りとも云うべきである。勅願寺繪旨が山門の訴に對する巨大な防壁となつたことはこの間の消息を物語るものである。もしも妙顯寺文書の中に凶徒退治の爲に觀音經を誦誦したという史料を見出しても怪しむには足りない。何故なら、変革期に於ける人間の在り方はすぐれて政治的であるから。

罪障消滅について

河村孝照

神と人との関係における宗教において、罪惡觀にその出発をおかぬものはない。キリスト教、回教然りである。然し、その滅罪にあつたつて、それを主宰し得るものは、全智全能なる神のみのよ

く爲し得るわざごとである。何故なれば、神の意志、命令に背いた人間が罪人であれば、それを許すも、許さざるも、神の意志一つにあるからである。

仏教として罪に出發する。然し、その罪は、倫理的罪惡觀を超克した罪である。仏陀の教へは無常苦とともに始まるのであつて、この三界火宅の処に居して、「嗚呼、苦なり」と悶絶するところ

に仏教の罪が伏在する。つまり、仏教の罪は、無常を常とみ、苦を樂とみ、無我を我とみ、不淨を淨とみる倒想をおこさしめるところにあるのであつて、別して云ふならば、無智之れ罪である。かく仏教の罪は、無智、無明であれば、無智をして智、無明をして明ならしめれば、罪は自づと滅することとなる。釈尊は、この無明を破つて仏陀となつたのであれば、罪の消滅は自らに課せられた問題であつて、也の宗教の如く、神に一切委ねられたものではない。つまり仏教においては、罪は神によつて與へられたやうな固執的なものでなく、自己自身の課題であつて、「自燈明自歸依法證明法歸依」を遺誡とする限り、罪を犠牲によつて贖ふことなくして、その消滅に力点のおかれてあることは蓋し当然であらう。無智によつて惡業をなし、この惡業によつて苦を感じ、それは又真相を雜染して六道を輪廻する時、これを罪障といふ、惡業が証道の障りとなるからである。されば惡業—雜染—六道輪廻は、いつまで行つてもその止まる處を知らない。然らば果して罪障深き凡夫はその罪を消滅して仏果を得ることが出来るであらうか。この間に對して、罪障消滅の論理的根拠を與へたものが仏性論であると言はれねばならない。

大乘仏教は、「一切衆生悉有仏性」を力説して止まない。仏性の開顯によつて如來は常住し、仏性の力用によつて、衆生は仏性を知見して仏果を得る。然らば仏性とは何ぞや。釈尊は緣起の法を觀じて仏陀となつた。緣起の法は、仏、世に出づるも、出でざ

るも、自然法爾として存する。この法を觀する仏陀の自内証は、亦緣起の法に外ならぬ、されば仏性は境としての緣起の法と、及び、それを觀する智慧とそれである。緣起の法は仏性の因であり、それを觀する智は因因であり、境智冥合して果として河禱菩提を生じ、果々として仏果を得ると言ふのである。かくして諸法は一切仏性ならざるはなく、又「あるもの」は一切それを藏せざるはない。衆生は仏性に包攝せられ、衆生は又之を陰藏する、然らば仏性を有することは、それが直ちに仏であるか。

五蘊仮和合の衆生は、この仏性を藏すると述べたが、然し仏性は緣起の法であれば、自性を有して衆生の内に有りと言ふことはできない。又ざりとて衆生の外にありとも言ひ得ぬ。それは恰かも琴の音が、琴の内に非ず、外に非ずして、因縁によつて妙音を出だすやうなものである。このやうに仏性は、衆生に即して「ある」のであるが、それは復そのまゝ衆生に外ならない。つまり一切の具体的存在を存在せしめてゐるものである。この一切「ある」もの、内部構造を示す緣起の法は、復常に因縁に従つて「なる」法でもある。「ある」ものはこの「なる」契機を孕みつゝ「ある」のであつて、緣起の法は、空間的に存在の「ある」原理であるとともに、時間的に「なる」原理でもあると言ふことができる。この「ある」ものは「なる」ことにおいて衆生も仏となり得る、緣起の法を觀じて境智不二となるとき、それは自己について言へば、法は自己の顯現であり、法よりみればそれは一切法の顯現で

あると言へる。かくして分別を超えて無分別の立場に立つて中道を証し得るのであつて、こゝに衆生も仏と「なり得る」と言ふことができる。

然し衆生は繭中の蚕の如く、煩惱につままれて仏性あるも之を知見することが出来ない。仏性を知見するには、善法の因縁を俟たねばならないが、その善法を待ち欲するものは何か、これ衆生の仏性であるのである。衆生の仏性は、自らの本性を顯現しようとする欲求をもつのであつて、この仏性本然の力用の存する限り、善法を不斷に相續して、ついに阿耨菩提を得て仏果を証し得るのである、この力用を、大涅槃經は「未來仏性力

妙法華經に見られる

文体上の特色

野村耀昌

現存する漢訳の法華經が正法華、妙法華、添品の三種であることは言を俟たぬが、此等三者の間には夫々異同があり、添品の序によれば、正法華は貝多羅葉梵本と類似し、妙法華は龜茲國所藏の梵本と同断である旨が記されて居り、添品の訳者鳩多等は于闐國王宮所藏の梵本を底本とし前記二訳をも照合して此

「といひ、これを分別して「阿耨菩提中道の種子」と言ふのであるが、この種子こそ、やがて仏果を實らせる衆生の智慧である。

かくして罪障は、仏性論においてその消滅への論理的根拠が與へられたのであるが、仏教が印度他宗教の唱へる動力因と質料因と止揚して、独特な種子説を開拓して仏性論を展開し、よく凡夫の罪障を消滅してその成仏への根拠を明らかにし得たのは、他の宗教の及び得ざる処であらう。(終)

れを作製せりと称して居る。而も彼は言を進めて正法華の遺漏多きことを指摘すると共に、一面に於て什訳妙本にあつては正法華に見らるる如き遺漏なきを讃えては居るが、それと共に、妙品には藥草喻品の半ばと、富樓那及法師品の初め、提婆品、普門品偈等を訳出せざるは惜しむべき落手なりと断じて居る故に、什訳當時の妙本が現行の妙法華とは相当異同多きものであつた事を推知し得る。その一々の比較考証は紙幅なき本稿に於ては許容し難きものである故、此処にはその概観を示すのみに止めるが、正本は總じて十卷より成り、各品の呼称も妙本とは全く異なるに對し、添品は各品の配列は正本並に梵本によれるものの如く妙本との間にや、逕庭があるが、その訳文は概ね妙本